

中間言語語用論研究における DCT (Discourse Completion Task : 談話完成タスク)

発表者：東京外国語大学大学院博士後期課程2年

小早川 麻衣子

中間言語語用論 (Interlanguage Pragmatics: ILP)

非母語話者の第2言語における言語行動形式(linguistic action patterns)、語用知識の習得と使用の研究。(Kasper 1989, 1996)

DCT (Discourse completion task 談話完成タスク)

短い場面描写と、それに続く短い研究対象である言語行為部分が空欄になったダイアログを含む、筆記による質問紙。被験者は与えられた文脈に合うと考える応答を記入する。(Kasper and Dahl 1991)

1. 本発表の目的

- 1) ILP 研究において、従来なされてきた DCT に対する批判を整理し、検証する。
- 2) ILP 研究におけるデータ収集方法としての DCT の適切な使い方を考察する。

2. 先行研究

2.1 データ収集方法を位置づける枠組みと DCT

- 1) Ellis(1994) SLA 研究において用いられるデータの種類の分類
- 2) Kasper and Dahl(1991) ILP 研究におけるデータ収集手法を位置づける枠組み。

2.2 DCT の種類

- 1) Open questionnaires タイプ： 情景描写のみでターンが示されていないもの。

例: Rose(1992) より

あなたは部屋で勉強しようとしているが、階下の学生の部屋から音楽が聞こえる。あなたはその学生を知らないが、音楽の音を小さくしてくれるように頼むことにした。

あなた：

(原文英語/訳筆者)

2) Discourse completion タイプ

応答部の空欄を導くターンや、応答に対する返答が示されていて談話を完成させるもの。

あなたは部屋で勉強しようとしているが、階下の学生の部屋から音楽が聞こえる。あなたはその学生を知らないが、音楽の音を小さくしてくれるように頼むことにした。

あなた：

学生：すみません。小さくしますね。

(原文英語、訳筆者)

3) その他の形式上の違い

- ・ 応答部の言語行動が明示されているか。(例：「頼むことにした」という指示)
- ・ 発話しないという選択の可能性。
- ・ 「自分」か、設定された人物の発話か。

2.3 DCT の特徴

1) 利点

- ・ 大量のデータが一度に採取可能。
- ・ 条件の統制が可能。
- ・ 比較可能なデータが採取可能。
- ・ 追実験が可能。
- ・ コントロールの度合いが高い場合、データ分析作業が比較的容易。(信頼性が高まる)

2) 欠点

- ・ 本物(authentic)でない。(妥当性の問題)
- ・ インタラクティブでない。
- ・ 設定されたターンの数で、言語行動を完成させる必要がある。・・・など

2.4 ILP 研究で用いられるその他の言語使用データ収集法の特徴

1) 自然(natural)データ

「研究対象としてでなく、コミュニケーション活動において生じる言語使用」(Ellis 1994)

利点：自然、すなわち本物(authentic)である。

欠点：

- ・ 非体系的。(比較可能なデータが得にくい)
- ・ 対象とする事象のデータが十分に得られない。

- ・インフォーマントの背景情報が十分に得られない。
 - ・追実験ができない。(データの信頼性)
 - ・データ処理、分析における時間と手間、および信頼性の問題。
-
- ・記録方法によるバイアス。

2) ロールプレイ

参加者が特定の役割を担って行動する社会的、人間的活動。しばしば前もって定められた社会的枠組みや場面に基づいたシナリオによって行われる。

(Crookall and Saunders 1989, Kasper and Rose 2002)

* ロールプレイの種類

統制(インタラクション)の度合いによる区別: Open RP / Closed RP

言語使用の産出方法の違いによる区別: Oral RP / Written RP (DCT)

利点

- ・パフォーマンスに影響を与える変数をコントロールできる。
- ・比較可能な言語サンプルが得られる。
- ・追実験が可能である。

信頼性が高まる(自然データとの比較)

欠点

- ・本物(authentic)でない。 妥当性の問題
- ・対象とする事象の十分なデータが得られない、データ処理の手間など自然データと同様の欠点。 信頼性の問題

3. 考察

3.1 先行研究による批判

- ・「自然さ」の過剰評価
- ・妥当性についての議論に比して信頼性に関する議論が少ない

3.2 データ収集法に関する議論の問題点

ILP 研究における DCT が、実際の言語使用データ(自然データ)の「代用」とみなされている。 それによって RP や DCT の妥当性が問題とされている。

3.3 ILP 研究におけるデータ収集方法の枠組み

- ・言語使用データ全体を包括する枠組み

・得られたデータが示す事象の性質

4 . 結論

DCT は、被験者の語用論的知識に関する情報を反映したデータであり、実際の言語使用データの代用として扱われるべきではない。ILP におけるデータ収集方法を論じるには、「データが示すもの」を再検討する必要がある。

参考文献

- Ellis, Rod (1994) *The Study of Second Language Acquisition*. Oxford University press.
- Beebe and Cummings(1993) Natural speech act data versus written questionnaire data: How data collection method affects speech act performance. In Kasper, G and Blum-Kulka, S(eds), *Interlanguage Pragmatics*. Oxford University Press,65-86
- Crookall and Saunders eds. (1989) *Communication and Simulation*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Kasper (1989)Interactive procedures in Interlanguage discourse. In W. Oleksy (eds.) *Contrastive Pragmatics*. 189-229, Amsterdam: Benjamins.
- Kasper (1996) Interlanguage Pragmatics in SLA. *Studies in Second Language Acquisition* 18. 145-148
- Kasper and Dahl(1991) Research method in Interlanguage pragmatics. *Studies in Second Language Acquisition* 13, 215-247
- Kasper, G and Rose.K.R. (2002) *Pragmatics Development in a Second Language*. Blackwell Publishing.
- Rose. Kenneth R.(1992) Speech act and questionnaires: The effect of hearer response. *Journal of Pragmatics* 17, 49-62